

2014 年度 湘南藤沢学会 研究助成基金
成果報告書

被災地復興を牽引する地域住民のコミュニケーション支援

環境情報学部 4 年 中川 晃輔 総合政策学部 4 年 古林 拓実
環境情報学部 3 年 小島 汐里 環境情報学部 2 年 桑山 菊夏
政策・メディア研究科後期博士課程 1 年 坂井田 瑠衣

1. 研究概要

東日本大震災により、住居移転に伴う新たな地域コミュニティの形成が進んでいる。震災から約 4 年経過した現在、被災者らは、仮設商店街や内陸地などの移転先で、近隣住民との社会的関係を再構築し、新たな地域コミュニティを築きつつある。被災地が真に復興するためには、新たなコミュニティにおけるコミュニケーションが活性化し、住民らが互いに協同関係を築くことが不可欠である。

そこで本研究では、気仙沼市民が感じる地域コミュニティの魅力や、気仙沼で仕事を続ける中で醸成された人生哲学を、30 名以上の職業人（通称「哲人」）に対するインタビューによって明らかにしてきた。インタビューから得られた語りは、記事に編集してポストカードに加工し、インフォーマント自身およびインフォーマントの近親者、関係者、近隣住民に配布することで、互いに他の価値観を共有することを促進し、再構築されつつあるコミュニティにおけるコミュニケーションを活性化することをめざしてきた。

2. 手 法

本研究では、これまでにインタビュー活動とポストカードの配布によって、地域コミュニティにおけるコミュニケーションの促進を図ってきた。しかし、実際に人々の人生哲学を引き出すことに成功しているか、およびコミュニケーションの促進に寄与したかどうかは、実証的には明らかになっていない。そこで今年度は、実証的研究として、ポストカードを手にした人々の追跡調査を行うとともに、気仙沼市内における広報のための映像収録を実施した。

インフォーマント自身およびその近親者、関係者、近隣住民の間で、ポストカードをきっかけとしたコミュニケーションが生まれ、より強固な社会的関係が構築されたかを追跡調査した。具体的には、以下の 2 手法によるインタビューを実施した。

(ア) インフォーマント自身に対する個別のインフォーマル・インタビュー

既に一度インタビューを行ったインフォーマントに対し、ポストカードを近隣住民と共有したことによる生活意識の変化や、新たに構築された社会的関係について、インフォーマルな形式で聞き取りを行った。

(イ) インフォーマント同士のグループ・インタビュー（映像収録を兼ねる）

2 人のインフォーマントを招き、お互いのポストカードを読み語り合うグループ・インタビューを行う。これにより、インフォーマント間の関係性の変化を実証するとともに、お互いの周囲で起こった変化を共有することで、さらなる語りを引き出した。

3. 調査対象

下記の方々を対象にインタビューを実施した。

(ア) 過去にインタビューを行ったインフォーマント 5 名

(イ) O 氏と K 氏の 1 グループ

4. 調査結果

4-1. インフォーマント自身に対する個別のインフォーマル・インタビューから

これまでにインタビューしてきた学習塾経営の O 氏、ラーメン店の K 氏、精肉店の S 氏、水産加工業の A 氏、喫茶業の U 氏の 5 名を対象に、再インタビューをインフォーマルに実施した。日頃意識することの少ない生活や仕事、故郷に対する意識を言語化し互いに共有することで、より明示的な生活意識が醸成されるとともに、互いのポストカードを読み合い、他者との相違点に気づくことで、さらなる内省が促されていたこと、またポストカードを数年後に読み返すことが、自分の意識が変化したこと／していないことに気づくきっかけとして機能していることが明らかになった。

またその過程で、調査者である我々学生とインフォーマントの間に強固なラ・ポールが形成された。強固に形成されたラ・ポールによって、インフォーマントからより率直なナラティブを引き出すことが可能になった。

4-2. インフォーマント同士のグループ・インタビューから

学習塾を営む O 氏とラーメン店を営む K 氏は、それぞれ震災で教室／店舗が被災した後、2011 年 8 月に偶然隣同士に店舗を移設した。今回は、当初のインタビュー後、各々の考え方や両者の関係性における変化、その変化に対するポストカードの貢献の有無を聞き取った。「学生の視点から記事を纏められたことで新たな視点を得た」(O 氏)、「考えを言語化することで、より確固たる意識を持つことができた」(K 氏)という主旨の発言が聞かれ、インタビュー記事をポストカードにしてフィードバックするという手法の有用性が示唆された。

インタビュー以降のインフォーマント同士の関係性については、「必ずしもポストカードだけの効果とは言えない」(O 氏)ものの、互いの考えを深く知ることが関係性の醸成に寄与したことが伺われた。

なおこのグループ・インタビューの様子は、今後の気仙沼市における広報活動に使用するために映像収録した。

5. 結 論

2つの方法による追跡調査から、本研究で構築してきた手法の有用性を一定程度明らかにした。さらに、数年前のインタビュー記事をもとに再インタビューを実施し、互いに語り合ってもらうことが、インフォーマントたちの更なる言語化を促進することが示唆された。今後は、上記の方法から得られた結果とインタビューの内容分析を対応付け、より確固たる有用性を示すことが必要である。